

大久保村の中村家（一）

中村 アキヤ

はじめに

人間とは不思議なもので年齢を重ねるにつれ、古いものの価値がわかるようになる。中学の修学旅行の思い出と言えば宿舎でのまくら投げぐらいで、案内された神社仏閣や正倉院の見学の印象はただ眠たかっただけだ。時代を経た寺社の佇まいや細密な建築技術に魅せられるようになったのは人生半ばを過ぎてからだ。同様に歌舞伎を筆頭にした各種古典芸能の味や、和歌俳句の奥深さ、絵画彫刻の神髄に触れることの喜びが判るようになったのもサラリーマンを卒業してからのことである。

同様にこれまで当然のように受け入れてきた個人的な事実、即ち新宿の真ん中に土地を所有し庭付き一戸建ての持ち家があることを幸せだと感ずるようになり、僥倖に恵まれた経緯を意識するようになったのは三十代になってからである。

以前、父親から中村の家は古い家柄で徳川幕府ができる前から現在地の大久保に住んでいたと聞いた時も、他の身近な事項に気をとられ、事実確認に真剣に取り組まなかったのも今思えば若さゆえの所業であろう。

その後時間的に余裕もでき、後述するような事柄を断片的に知るにつけ、これらを集大成して子孫に残すことは意味があると思うようになった。幸い私は探究心もあり、集めた資料を纏めて推理する能力もあると自負している。調べた事柄はどこまで本当か自信はないが、余力のあるうちに後世に残しておこうと思い立ったのが本文である。

直接のきっかけとなったのは、三枚の大きな青白色の石版である。長さ約七十センチ、幅約二十センチ、厚さ二センチほどの結構な重さの石版は、私が生まれてから、いや生まれる前からずっと我が家の庭の隅に三枚重

なって半ば埋もれ放置されていた。この齡になって庭を整理しようと、石版の表面を洗ってみると梵字が現れた。

浅学菲才の身ではとても解読できないので新宿歴史博物館に連絡して由来を調べてもらった。二名の担当者の調査により、この石版は中世に造立された三基の供養塔であることが判明した。これらは秩父長瀬方面に産する緑泥片岩を材質とする「武蔵型板碑」と呼ばれるもので文字資料の少ない中世における貴重な歴史資料であるという。

これらの板碑（いたひ）を同博物館に寄贈する際に受領した調査資料の抜粋は次の通りである。

『一基は徳治三年（1308）、他の二基は正長三年（1430）と嘉吉元年（1441）の銘入りである。鎌倉期と室町期のこれら板碑は浄土信仰に基く供養塔で、三番目のものは生前供養板碑である。

頭部を山形につくり上半分には梵字や圖像で阿弥陀（キリク）や観音、勢至が刻まれ、下半分には年号、供養者などの銘文が刻まれている。

江戸時代からは、この種の供養塔は木製に変わり以後この種の板碑の出土はない。爾来この種の板碑は橋や階段、漬物石などに転用されたらしく出土数は少ない。

これら板碑の置かれていた原位置は不明であるが、中村家の所有地内にあったと考えられる。当家は江戸時代の東大久保村の名主中村理右衛門の子孫であり、近江の守護佐々木氏の流れをくみ、十七世紀初頭に当地に來住したようで、広大な土地を所有していたという。

現在の中村晃也宅は鎌倉街道伝承地や室町期の集落遺跡である新宿六丁目遺跡にほど近く、板碑の原位置もこの周辺と考えられる。

中村家は江戸時代には戸塚村と大久保新田の名主を代々勤め、明治時代になってからは副戸長、村長、郡会議員などの公職を勤めた旧家であり、貴重な手がかりとして「新編武蔵風土記稿」（巻乃十一、豊島郡乃三）に出自の伝承が掲げている。云々…。』

文中の鎌倉街道伝承地とあるのは鎌倉時代に御家人が有事の際に「いざ鎌倉」と馳せ参じた街道で、鎌倉から上道（かみつみち）は武蔵、上野の国府を通り碓氷峠を越えて信濃へ、中道（なかつみち）は下野の国府を通り白河の関を越えて奥州へ行く道である。同様に下道（しもつみち）は常陸の国府を通過して勿来の関を経て奥州へ行く道であった。

問題の伝承地とは鎌倉街道中道のこと、現在では神奈川との国境の丸子の渡しを通過し、渋谷区の並木橋、明治神宮表参道を通り、新宿区に入って新宿御苑を経て、後述する内藤家の菩提寺である大宋寺の横から北上して西向天神社に至り、我が家から徒歩一分の抜弁天巖島神社から戸山公園に抜け、面影橋を経て滝野川に通ずる古道のことと思われる。

この抜弁天巖島神社の由来として、八幡太郎義家が後三年の役（1083～1087）に向かう途中に当地に宿営し富士山を拜んで戦勝を祈願し、奥州鎮定後戦勝のお礼に巖島神社を勧請して社を建てたという伝承が残っている。

正直いって庭に放置してあった板碑がそんな古いものとは想像もしていなかったがこのまま放置すればさらに風化してボロボロになり、銘文も解読不能になるに違いないので、この機会に新宿歴史博物館に寄贈してよかつたと思つた。

現在の中村家

筆者の家はJR山手線の新宿駅から花園神社を経て都心に向かって徒歩で十五分ほどの距離にあり、新宿駅のとりの新大久保駅からもほぼ同様の距離にあたる、いわゆる環状線の内側に位置している。

通称職安通りと明治通りの交差点に、都営地下鉄大江戸線の東新宿駅があるが、そこから職安通りを都心に向けてダラダラ坂を五、六分も上った交差点の一角に前述の抜弁天巖島神社と呼ばれる小さな神社がある。筆者の家はそこから歩いて一分の近くである。

古い地図をみると地名からも容易に想像されるように当時の大久保（大窪）村は大きな窪地を中心に拓けた村で、湿地帯の中心には可仁川と呼ばれる小川が流れていた。

この小川は現在の新宿三丁目（旧四谷三光町）近くの花園神社の裏を通り、現在の新宿六丁目交差点、以前は新田裏交差点と呼ばれるあたりで明治通りを横切り、高台にある西向天神社の下で北方へ曲がり、砂利場と呼ばれていた窪地を過ぎて、現戸山ハイツの低地部分から早稲田を抜けて神田川に流れ込んでいた。

西向天神社の下田圃はどうに埋め立てられ、今や住宅密集地と化し、前述の小川は暗渠になって道路の下を流れている。前述の鎌倉古道はこの川沿いにあった道と思われる。

戦災で全ては灰燼に帰したが、分家の我が家はこの小川（可仁川）の東岸の台地上に、中村の本家は西岸の窪地の中心に広い屋敷を構えていた。小川の西岸は再び緩やかな台地となり、現在の西大久保から百人町へと続いている。近所に中村姓の家が多いがそれらは直接の親類なのか、はたまた名前だけの遠い親戚なのかは判然としない。

高台にある我が家は昔から「山の中村」と呼ばれ、やや低地にある本家は「下の中村」と呼ばれていた。

台地の高さはそれでも五、六メートルはあり、我が家の庭からは、今では新宿駅西口の高層ビル群に遮られているが、晴れた日には富士山ばかりではなく、ふもとの丹沢連山や奥多摩丘陵の尾根につながる御岳の特徴あるシルエットを夕焼け空にくっきりと見ることができた。

分家とはいえ、父親が相続した昭和二十六年（1961）時点で、我が家は二十六筆の貸地を所有していた。戦災前の祖父の家は、公道との境にある潜り戸つきの木戸門の内部にあり、十軒ほどの家作に囲まれていた。大きな石燈籠を巡る敷石の奥に立派な玄関がありその右手にいわゆる西洋館と呼ばれたガラス戸の多い洒落た書斎があった。二階建ての家の玄関は六畳大で

その奥の客間は襖をとりはらうと二十畳の広間になった。板張りの台所は十畳ほどあり、同じ大きさの土間には二基の大きな竈が並んでいた。風呂場は外にあり、五右衛門風呂に 手押しポンプで井戸水を満たすのは当時の女中の役割だった。

本家の「下の中村」はさらに大きな屋敷で客間に面した表庭には大小の池を巡って遣水が流れていた。仏間も広く、壮麗な仏壇があった。裏庭には数本の物干し竿が立ち、多数の無花果が植えてあったのを覚えている。

我が家の敷地の西側は急勾配の崖地で竹藪が生え茂り、つい十数年前まで陽の当たる空き地にはフキノトウが自生していた。家の前は急な石段で、以前は、階段の石の大きさがマチマチで夜歩くのは難儀であった。夜になると裸電球の薄暗い街燈の下で竹藪が不気味にざわめき、これは藪に住む小豆婆が小豆を磨ぐ音だと父親に脅かされたものだ。

その昔は、ここは石段ではなく急な坂道だったようで、豊玉郡誌には「梯子坂、久左衛門坂北方の裏道に在り、東へ登り十間許り、坂道急にして恰も梯子をのぼる如し、故に名付く」という記載がある。現在は新宿区教育委員会の新撰東京名所図会の「梯子坂」という標識が立ち、その写真は平成十九年発行の日本文芸社「東京の階段」という本の表紙を飾っている。

この坂は、今は梯子のように急ではないが、昔の風情が残っているのか、よく映画やビデオのロケ撮影に使われ、窓辺を明るくするために大きなライトを我が家に持ち込まれたこともあった。今でも時折モデルとカメラマン、それに反射板をもった撮影助手が天気待ちをしている姿が見受けられる。

「山の中村」も「下の中村」も大きな蔵を持ち多数の家作やら貸地を持っていたところをみるとかなり昔からこの土地に居着き、百姓とは名ばかりで、この在の名主のような役割を担っていたものと思われる。

蔵に潜り込んでホコリにまみれた和箆笥の陰からボロボロの鎧を見つけ子供心に驚いたことがある。そういえば錆だらけの槍も長押に掛けてあった。分家の我が家ですら終戦時には二千坪の土地を有し、祖母が記帳していた

地代徴収の大福帳は厚さ五センチを下らなかった。そこには「田圃裏」とか「砂利場」などの地名が記載されて往年の小川の存在を示していた。

中村家の菩提寺（大悲山観音寺）

観音寺というこの寺は高田馬場（旧戸塚）三丁目の小滝橋に近く、神田川畔からは直線にして五十メートルの距離にある。菩提寺というだけあって、中村家と銘うった墓石が全体の六割を占める。墓石に刻まれている家紋は一様ではないが、平四つ目結の家紋を持つ本家に残る最古の墓石には辛うじて万治二年（1659）の年号が読み取れる。

これは江戸幕府が開設されてから五十六年後にあたる。中村家の当主は代々、七右衛門と称した模様でこの墓石の主は中村七右衛門政義のものと確認できる。少なくとも当家は江戸時代の初期から、いやその少し以前から現在の東大久保の地に居を構えていたことが偲ばれる。因みに分家の我が家の家紋は丸に隅立四つ目結である。

新宿歴史博物館に示された「新編武蔵風土記稿」という古文書の巻之十一豊島郡之三の戸塚村の観音寺の項にこんな記載がある。

「観音寺、開基はかんこう坊という人にて俗名中村氏、故ありて当所に来たり、草庵を営み遂に一寺をなせし云、子孫外記は寛永の頃断絶す」また「東大久保村名主理右衛門も其の一族なりと云」。

故ありてとは落ち武者ゆえ氏素性を明かせぬままと解釈できよう。また当所とは観音寺のある場所すなわち現在のJR高田馬場駅に近い新宿区の旧戸塚町のことと思われる。

前述の新編武蔵風土記稿なる書は、昌平坂学問所編纂の書で文政十三年（1830）に完成したものであるが、ここには中村家に関する更に詳細な記述があり、今後の調査の良い手がかりとなると期待に胸が弾んだ。

大久保村の中村家

前述の武蔵風土記稿の東大久保村の項には中村家についてこんな記載がある。

「旧家者、理右衛門名主を勤む。中村を氏とし家系一卷を蔵せり。其の略に、先祖七右衛門信時は佐々木近江守源ノ氏信十二代の孫中村外記信高の二子なり。寶徳二年四月二日（1450）死す。

其の子信義また七右衛門と称し文明三年（1471）九月二十八日に死す。其の子高信、其の子政信、其の子政利。政利信定を生む。信定は七郎右衛門と称し、慶長三年（1598）死せり。この時民間に下り、九代にして今の理右衛門に至れり」。

この記述によると理右衛門の九代前の信定が没したのは慶長三年（1598）で、信定没後「民間に下り」ということはその前は武家であったことが想像できよう。

してみれば信定の子弟も慶長五年の関が原合戦（1600年）以降に一挙に増えた落武者の一人で武蔵の国に流れ着き定着し、慶長八年（1603）の江戸幕府の開設を迎えたとも考えられる。

すくなくとも中村一族は江戸時代の初期に江戸の西の外れの高田馬場（戸塚）、そして東大久保に分散して住み始めたとみられる。

これらの記述から家系を調べるに当たり、佐々木家十二代の氏信、その孫の中村外記信高、慶長三年に没した中村七郎右衛門信定などの存在の有無がポイントになると考えられる。手がかりは何処にあるのだろうか。

また武蔵風土記別稿に「牛込分東大久保（大窪）村、天正十九年（1591）玉薬同心五十人の給地となりし時は、百姓は長兵衛、七郎右衛門、久左衛門、三四郎等四人のみなり」との記載がある。

玉薬同心が東大久保に給地を拝した天正十九年（1591）というのは家康が本拠を江戸に移した翌年で家康はまだ入府しておらず、当時は家康に滅ぼされた北条氏（小田原）の残党や食い詰めた野武士や浪人などが隙を見て

乱を起こす危険性があつた時代である。

家康は不測の事態をふせぐため、内藤清成と青山忠成を先遣隊として江戸に送り込み、その内藤清成は馬で一日に廻れるだけの土地を与えろといわれ、駿馬を駆って一周し、四谷、代々木、大久保、千駄ヶ谷にまたがる広大な地を拝領した。その土地が現の新宿御苑を含む内藤新宿といわれる所以で、新宿御苑に隣接した多武峰内藤神社にこの時疲れ果てて死んでしまった馬を祈念した「駿馬塚」が現存する。

別稿記載の、当時名のある百姓が四名しかいなかったという事実は、この土地は未開拓の辺鄙な田舎だったことが想像できる。この四人の百姓のうち久左衛門は梯子坂のとなりの久左衛門坂をつくった島田家の人でその子孫は今も東大久保に居を構えている。この時に記載されている七郎右衛門は年代から見て慶長三年（1598）に没した中村七郎右衛門信定のことである。

一方、家康のお庭番である服部半蔵の率いる鉄砲組は甲州街道と鎌倉街道の交わる、現在の新宿伊勢丹付近に陣を構えていた。前述の玉薬同心の五人の給地を基にこの鉄砲組百人同心の組屋敷にとあてがわれた土地が現在の東大久保百人町一帯であるという。

百人町の中心地に現存する皆中稲荷神社は、撃った鉄砲玉が全て当たるように祈願する聖地であり、彼らは、平時は玉薬の原料である硫黄、燐、硝石を肥料に転用してツツジの苗を内職として栽培したという。

ちなみにツツジは新宿区の区花であり、皆中稲荷神社では年一回ツツジの即売会を開催している。

またこの年、大笹箒奉行榊原小兵衛配下の同心五十名は四谷笹箒町および大久保笹箒町（現西大久保）に組屋敷を拝領し、同時に東大久保村、西大久保村、戸塚村などを知行地として拝領している。四谷、笹箒町の地名は今も残っている。

もう一度新編武蔵風土記記載の中村家の系図を整理すると

佐々木家十二代氏信―子―中村外記信高―次男信時（1450没）―信義（1471没）―高信―政信―政利―信定（1598没）―政義（1659没）を含む九代を経て風土記にある大久保村の理右衛門（1830年頃）という、それらしきものが描ける。

余談だがこのような記載は、時代も背景も異なるが新約聖書の冒頭にあるイエスキリストの四十代に及ぶ系図（アブラハムの裔なるイサクの裔の子ヤコブの子―ユダー―パレス―エスロン―アラム云々）を彷彿とさせ、人間の為すことは東西を問わず共通である。

前述の古文書の巻之十一豊島郡之三の観音寺の項に記載がある大久保村の名主を勤めた中村理右衛門なる人物はもしかしたら我が家系と関係があるのかも知れぬと思いはじめた。

後述するが、中村家当主は代々七右衛門、または七郎右衛門を通称として名乗っていたらしいが、武蔵風土記編纂時代は利右衛門または理右衛門を名乗っていたようだ。

戸塚村の中村家

一方、新宿歴史博物館には「戸塚中村文書」という膨大な古文書が残っている。それによると、戸塚中村家は高田馬場の観音寺を菩提寺とした旧家で戸塚村と大久保新田の名主を代々勤め、明治時代に入ってから戸長、村長、都会議員などの公職をつとめた旧家であり、この点東大久保村の中村家と非常に似た境遇にあり、江戸時代家督を継いだ者は代々甚右衛門を襲名している。

ところが、ここが肝心な点だが、戸塚村の中村家については江戸時代以前の状況を語る史料はない。ただ家記ともいうべき「中村家古事略記」が現存し、観音寺過去帳写には初代（万治元年、1658年没）から歴代の没年や法名の非常に詳細な記録が残っている。因みに大久保村中村家初代の最古の墓標は万治二年没の中村政義である。

出自に関しても観音寺や東大久保村の中村家との血縁関係を示す史料はないが、観音寺とは初代から寺檀関係は続いている。

大久保村の名主の中村と戸塚村の名主の中村との関係はどんなものであったのだろうか？ 新宿歴史博物館の推論によれば、江戸初期に中村姓の三兄弟が武蔵の国に流れ着き、家系書を持っている長男が大久保村に住みつき、次男または三男が戸塚村に居を構え、うちの一名が観音寺を創設したのであるという。観音寺の家系は寛永の頃断絶したが、大久保村と戸塚村の中村はその後相互の交流がないまま現在に至っているという。

これらの推論はにわかには信じ難く、次に述べるような種々の疑問点が湧いてきた。

疑問①、中村一族は何故江戸の西のはずれの大久保村や戸塚村に住みつけたのか、その時代背景にはなにがあったのか？

疑問②、武蔵国在の中村家の家系を遡ると、なぜ近江の守護佐々木氏信につながるのか、何時佐々木から中村に改名したのか

疑問③、何故現在の中村家の菩提寺が観音寺と呼ばれたのか、

そんな疑問をいただいたまま数年経過し、ある時山梨県塩山市にある武田信玄菩提所の恵林寺を訪ねた際、偶然快川和尚が焼き討ちにあったいわれを知り、武田家にかくまわれた近江の守護佐々木一族が甲州街道を武蔵に向かつて落ちた事実から、その一行のなかに中村家の祖先がいたのではないかと思うようになった。(続く)

(7350語)